●本誌は日本に於ける婦人運動の先驅也

世界婦人

寄書

弱者陣頭に立てり

（内村鑑三氏とツラピスト）

小野吉勝

遠く塵寰を絶つて荒涼寂寞を極めたる北海道の野を撰んで一の會堂建てり。是れを之れツラピストの修道院となす。ツラピストとは何ぞや、世をも人をも顧みず唯自己一身の清淨を保たんことのみに腐心し、謂へらく現世に在て見るもの聞くもの一として罪惡瀆神の媒介ならぬはなし、如かず俗世と絶つて其身を潔ふせんには、と、即ち同志相集りて勤行を全うせんが爲に、修道院を建て、別天地を形成せる消極的遁世的、將た絶體個人主義的基督教徒の一團なり。其一身の清淨を保たんとするは可也、然れども吾人の怪訝驚嘆に堪へざるものは、彼等が一切院外の人と絶つ耳ならず、彼等自家の間に於ても猶一言半句口を利く能はざる規約にして、若し他に對し用事あるときは手眞似を以て啞の默談をなすこと之れ也。この人情に反せる不自然の戒律を破るものあるときは、彼は瀆神の大罪を宣告せられ直ちに修道院を追はると聞けり。消極無爲の宗教の人生を誤ること何ぞ甚しきや。

顧て吾人は内村鑑三氏を想ふ毎に此ツラピストを連想して坐に涙なき能はず。今氏の主張を摘記せば次の如し「人生何爲れぞ爾かく罪惡多きや、神命を穢すの何ぞ甚しきや、汝嚴重に戒律を守れ、之れ救を得るの第一義なり」と、然り救を得るの途は戒律を守るにあるは吾人亦之を知る、而かも此の如きは信徒の消極的方面にして、如何にして世のため人のために盡すべきかの積極的方面を閑却するもの、吾人が氏を以つて消極的將た遁世的ツラピストに比する所以也。宜なり氏の勢力の年と共に減退し、此數年の如きは孤城落日の觀を呈して角筈の隱家に蟄居するの運命に遇ひぬることや。氏は嘗て教會無用論を唱道したり、而して氏の矛盾せる教會無用論を唱ふる傍ら自己の隱家を以て教會に代へ、其子弟を集めて說教せり。基督曰く「爾曹二三人集りて祈る所我れ必ず居らん」と、而して其集る所の何處なるを問はず之を教會といふ、内村氏が唱道せる教會無用論の如きは社會生活を營める人類に取りては瞑府の豆腐屋の辭よりも猶杳に沒交渉のものたり。人生苟くもロビンソンクルソーにあらざる限りは教會また無かるべからず。果然氏も事實に於て自家の說を粉碎するの奇觀を呈せり。

サン、シモンは當時の教會の無勢力となりし原因を教會が其人類救濟の使命を忘れて、現實の活社會と沒交渉ならしめし態度にありとて絶叫して曰く、

「カソリツクと言はず、プロテスタントと言はず、總ての教會が斯が如く無勢力となれるは何に因るや、他なし、彼等は憫むべき貧者を救ふべき現世の大使命を忘却したれば也。又彼等は徒らに無益なる神學上の爭論にのみ身を委ね、現在社會の活問題に對しては極めて無智なれば也。」

と、之れ豈にサン、シモン當時（十九世紀初葉）のみならんや、此の如き警告は今日に於ても適用せられて猶餘りあり。

石川旭山兄三十七年一月平民新聞紙上二大宗教家てふ標題の下に内村鑑三氏を評して曰く「内村先生は强く道を宣べんとて堂を山頂に建つ故に先生の道は入り難くして且つ成り難し」又曰く「内村先生は海老名先生より若きこと四五歳（海老名氏當時齡知命）漸く世俗を避けんとするの傾向あり、而かも日一日圓滿に赴くの狀を見る、今や先生門を閉ぢて讀書三昧に入る、其蘊蓄愈々深きに從ひ、後世を感化する亦大ならん」と。

然るに今や氏は氏を師と仰ぎ兄と慕へる福田英子女史を、社會主義者の故を以て之を破門するの無情を敢てせり。社會主義は利己主義ならば休む、苟も世の爲人の爲に盡さんとする愛の發現なる以上は、唯愛を實現する方法の自家の說と毫一ならざるの故を以て之と絶交し之を破門し、而して荏弱き女子をして懷疑の深淵に沈淪せしめんとするに至つては、其冷酷吾人將た之を何とか評せん、之れ果して神意か將た氏が師事せる基督の聖意か、嗤、氏が所謂異教徒にも劣らずや、斯の如くにして子弟を導くとや、何等の滑稽ぞ、嗤、嗤。ポーロは曰く、

「然れば我等强者は强からざる者の懦弱を負ひて己の心に悅ばさるべき事也、我等おの〳〵隣の德を建てん爲に善をなして之を悅ばすべし、キリストすら尚おのれを悅ばす事をせざりき」

と、斯の如くにして始めて光榮ある基督教徒たるの本分と云ふべし。キリストの愛より我儕を絶らせん者は誰ぞや、患難なるか或は困苦なるか迫害か飢餓か裸程か危險か刀劍なるか、吾人は恐る之或ひは内村鑑三氏に非らざるか。

更に轉つて吾人は基督教と社會主義との關係に就て世の疑惑を解かんが爲に、茲に新紀元誌上安部磯雄先生の所論の要點を紹介す。先生曰く

一、基督教は現世の罪惡及不幸を以て前世の罪報となさず、社會主義が罪惡に對して採る所の解釋法亦然り。

二、基督教も社會主義も共に弱者に同情を表する上に於て一致す、而して基督教主義が精神的方面に於て絶對的寬容主義を標榜する如く、社會主義は物質的方面に於て同一の主義を主張す。

三、基督教は大體に平等主義を實行する點に於て全く社會主義と其徑路を一にす、而して基督教が精神的方面より平等を唱ふるに對し、社會主義は先づ經濟上の平等を實行し漸次之を政治、社會（以上物質界）道德（精神界）の方面に及ぼさんとす。

四、基督教も社會主義も共に其理想の全部を近き將來に於ては實現し得ざる遠大の理想を有する點に於て相一致す。

之れ基督教と社會主義との相一致するの點也、而して其相關に就て結びて曰く、

兩者は其主張に於て相似たる所ある耳ならず、彼等が提携するに非れば各其目的を達すること困難であらうと思ふ、吾人は社會主義の唱道するが如き社會に非んば到底基督教の道德が實行され得べしとは信ずることが出來ぬ。如何に博愛が吾人の養ふべき美德なりとは言へ、現社會に於て遠慮なく之を實行することは出來ぬではないか、蓋し現社會に於ては自他の利益相反すること少からず、從て吾人は道德を行ふに多くの困難を感ずるのである、若し社會にして平等主義と協同主義との上に立たば、吾人の一言一行は自ら博愛の道に合ふことになるであらう、基督教が社會主義の助を借らざるべからざるは無論の事ではないか。然れ共社會組織の改革は個人的基礎を無視して實行することは出來ない、社會主義の唱道する社會組織の現出する時には最早個人の道德品性も今日の如きに非ざることを豫想せねばならぬ、故に社會主義を宣傳する者は同時に精神的方面にも努力する所がなくてはならぬ、別言すれば吾人は飽く迄も自ら淸潔なる品性を修養して改革の事に當らねばならぬのである。

此信念此主張により基督教徒にして社會主義に參ずる吾人等は、一面靈界の飢渴を訴へて天父の靈前に跪き、之に依りて新生命新意義を鼓吹せられて他面社會改革の事に當らんとはする也、勿論吾人等の薄信微力なる到底この重大の任に堪ふる能はざれども、吾人が此事に微弱なる全力を盡さんとするは、吾人が神より命せられたる本分を行ふまで也、其成ると成らざるとは唯天父の聖意に存せんのみ。而して又吾人はポーロと共に「然れば我が趨るは定向なきが如きに非ず、我が戰は空を擊つが如きに非」ざることを確信せんと欲す。

最後に吾人は「我儕を愛める者に賴り凡ての事に勝得て餘りあ」るの感に堪えざれども、猶深く省みて吾人の荏弱を歎ち慨歎の涙を以て祈る者也。福田女史は覇氣に滿てりと雖猶涙脆き婦人なり、其衷情を察して吾人同情の念に堪えず。而かも同女史が今回内村氏より破門せられたる事件の如きは、事極めて重大問題たり、蓋し所謂基督教徒が基督教徒にして社會主義者に對する挑戰の宣言なれば也。吾人微力なりと雖敢て挑戰に應ぜん。

吾人は内村鑑三氏に問ふ、君は何の權威ありてか世の砕けたる靈魂を破門するの無情を敢てせんとはする、敢て問ふ。

音樂家ゼンニー、リンド女史

●本誌を讀まざるものは眞の婦人に非ず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

治安警察法改正案通過

福田英子

去る十六日は豫て請願中なる治安警察法改正案が議會に提出せらるゝので、私共同志の者は午後一時を以て衆議院の傍聽人集合室に相會し、傍聽に出る事にしました。

顧れば過ぐる十八年、私共同志が世に大阪事件として知らるゝ擧を企てたのも、皆此れが設立を見たいといふ要求からであつた其議會は愈其後開設せられ私共多年の希望は爰に遂げられて、年々歳々、此の日比谷原頭の一堂で國事が討議せらるゝ事に成りました。私は議會の狀況を想像して心窃かに其盛事を慶して居りました。今又爰に議會開設後、初めて議事堂の門を潜つた時には、ですから、何とも言へない氣持がしたのであります。

偖愈傍聽席に着いて見ると、想像とは大違ひ、苦んで產んだ兒の生ひ立ちの惡るいにも譬へませうか、神聖なるべき議場の光景は、亂雜喧囂を極めたもので、吃驚し、落胆して了ひました。

其内に私共が傍聽の眼目なる改正案を議する順に成りました、私共は、片唾を呑んで成行如何と待つて居ましたが、案の通り、殆ど滿場一致といふ多數を以て衆議院を通過したのであります。私共は聰明なる衆議院議員諸君に此事あるはもとより當然の事と思つて居ました。貴族院に於ても多分、否必ず通過疑ひなしと信ずるのであります。現今の婦人が如何なる地步を社會に占めて居るかといふ事は、夙に貴族院議員諸氏も御存知であらう、愛國婦人會――最も私共とは全然其主義は異にして居ますが、兎にも角にも社會上で婦人の活動して居るといふ例を示す爲めに引證しますと――などの實例に仍つて充分了解せられて居る筈の貴族院も、必ずや斯改正案には贊成の事と思はれます。然るに政府委員といふ方々は何といふ頑冥な方々であらう!、何といふ事理を判へぬ方々であらう!。飽く迄反對を唱へ、裁判傍聽や議會の傍聽或は新聞紙の政治上の議論(最も是は政府の力で婦人に讀むなといつた所が、文字あるものなら禁止の効力は勿論無いが)は見ても好いが、政談演說の傍聽は出來ないと言はれるのであります。其理由とする所は、此後者は婦人の淑德を汚すといふのであります。何といふ可笑しな議論でせう。政談演說が婦女子の淑德を汚すといふ事が已に可笑しい上に、殆んど同じ性質のものに差別をつけるとは殆んど飯を飛ばす沙汰としか思はれません。併し私共は此政府委員の方々が騷ぐ世界の大勢に眼を着けて國家百年の大計を誤らぬやうに、社會公益の爲めに瘁されん事を偏に希望して措かないのであります。

私共は多年懷だける所見の一部が無事に議會の一角に於て勝利を博したのを見て、衷心愉快に堪へません。當時の事情は都下の諸新聞にも掲げられて居ましたから、已に世人は知る所でありませうが、特に私は爰に記して同志諸兄姉と歡を同うするのであります。(三月十七日稿)

笑ふべき貴族院

昨夜貴族院委員會で本案が否決せられ、今日議事日程に上ると聞き、堺爲子女史と傍聽に參りました。鎌田榮吉氏は起つて理義明晰なる贊成演說をなされました後から、何とやらいふ人が婦人を奴隸同樣に心得て居る腦髓から流れ出た古臭い時勢に合はぬ、而して又論理の些しも透徹しない反對演說があつて、採決せられたのを見ればマア何でせう、立派な、筋の立つた、時世に適當した、說明演說に贊成する四名に對する、愚にもつかぬ演否に贊成する多數で否決にならうとは誰

(三面へ續く)

海內時事

○吾等の請願衆議院を通過す

吾等の請願が請願委員會分科會の可決する處となり候は前號所載の如くに候が其總會にては望月長夫氏の發議にて「發起人たる事を得」るとなり、左の如き議案となりて本會議に附せられ候。

治安警察法中改正法律案

治安警察法中左の通り改正す

第五條中第五項を削り第七項中「女子及」の三字を削る

理由

今や時世の進運に伴ひ女子が政談集會に參同するを禁ずるの必要を認めず、是れ本案を提出する所以也

かくて去月十六日愈々本會議に附せられ政府委員の反對ありしにも拘はらず直ちに可決確定せられ候。當日數十の同志は袂を聯ねて傍聽に出掛け候。詳細なる記事は別項に付きて御覽被下度候。貴族院にても目下特別委員の手にて審査中の由に候が何卒從來の迷霧を排して可決せられん事を熱望いたし候。同委員中大浦兼武の名を見出し候はわれらの少しく危險に存候處には御座候へ共、諸新聞雜誌等筆を揃へて贊同いたせし事に候へば眞逆に頑迷なる所爲は有之間敷と被存候。

○田添女史の『力の體現』

田添幸枝女史は田添鐵二氏の夫人に候。曾て伊太利に畫を學び、歸來故山に臥する事十年、數年前良人と共に東京に出で、西洋美術協會なるものを創立し、研鑽の傍子弟の教養に力を盡し、眠れる日本の美術界に覺醒の彈丸を投ずべく晝夜ブラッシに親しみ給ひし處、今回東京府博覽會の開設あり、機逸すべからずとなし、多年の苦心に成れる『力の體現』と題する油畫と共に協會員の作品をも出品せられ候に、正木氏を長とせる同會の審査會は悉く落選せしめ候由。われらは未だ女史の技倆を知らず又日本美術界の暗黑面にも精通せざるを以て兎角の評を試み得ず候へ共、たゞ女史が婦人の身を以て日本洋畫界に革新の旗幟を擧げられたる自信の强さと意氣の壯なるとに深く敬服するものに御座候。尙今回落選の運に逢ひし作品は悉皆帝國ホテル內大客室に陳列し有識者の批判に供せらるゝ由に御座候。

○悲惨なる慈善家の最後

今より二十余年前京都同志社の卒業生に横山好子といへる人あり。またうら若き身を以て一生を慈善事業に捧げんと健氣なる決心の下に、種々なる修養の後、日露戰爭起るや軍人遺兒遺族保護會を組織し全國に亙りて一二才の乳呑兒にても私生兒にても種類を限らず七十余人收容いたし候ひしが、東北飢饉の際にも自ら凶作地に至りて病兒嬰兒のみ十五名を連れ歸り力を盡し財を傾けて養育いたし居候處、子供がうるさしとて近隣よりの苦情止み難く家主より立退を命せらるゝ事數回、爲めに市內を去りて府下下練馬村(板橋より二里余)に引移り熱心事業に從事せられ候へ共、寄附金は皆無となり一同飢に迫らんといたし候より女史は每日早朝遠き路を徒步にて市內に來り、慈善家の門を叩いて寄附金を請ひしも、無名衰殘の慈善事業は所謂德高き慈善家の一顧をも價せず、あはれや女史は夜な〳〵失望の心を綿の如き體につゝみて歸宅せられ、其三更四更に及ぶことも珍しからざりし由に候。昨年九月時間と費用の經濟を慮りて府下中野村に移轉いたし死者狂の活動を試みんと意氣益々あがり候ひしに、其夜より發熱甚しく十二月大學病院に入院いたし候も骨盤結締組織炎とて從來例少き病症にて、百日程が間一睡も得せず、苦悶輾轉の末遂に去月四日卅五才を一期としてこの世を去られ候。

嗚呼雄々しかりしわれらが姉妹をあだに屠れる慈善事業よ、汝は所詮空しかるべき名なり、資本家制度の生命と共に呪はるべき惡魔なり。

○婦人實業家の覺醒

女子商業學校の卒業生には中々有爲の人少からず、森村組の清水碓氷子、清國天津にて外國貿易を爲す高橋孝子、同地富成洋行の岩谷わづさ子、横濱菅川商店の江藤作子・吉田みつ子の諸姉は何れも二十二三の花盛に候が、夫々手腕を振ひつゝあり、殊に今の豪商株屋などの不德不義を罵り、商業家たるの資格なき彼等とは斷然結婚せずと決心いたし候由。われらはかくしてやゝに覺醒の域に進みつゝある婦人の意氣を壯とするものに候。

○愛國婦人の大集會

來る六月愛國婦人會總會にては參會の會員に戰利品たる露國の銃丸を其儘針入、ナイフ等に作りし紀念品を分與すべしとの事に候が、之を聞き傳へて全國六十余萬の會員は何れも其好奇心と虛榮心とを挑發せられ候へ共、實際の參會者は五萬人位有之べき由。嗚呼之がわれら同志の眞面目なる會合ならばと感慨しきりに候。

○製糸工女の出稼

飛驒國吉城郡古川町地方より長野縣下へ製糸工女として、本年一月より二月迄に出稼いたし候人數及び工賃を聞き候に、古川町にて百七十五人賃金一萬一千圓、國府村七十九人賃金一萬九千百六十圓、細江村七十三人賃金八千圓、河合村二十四人賃金二千四百圓、坂上及坂下村各十五人賃金六百圓、合計千五十四人賃金四萬二千百六十圓に候。資本家制度の犧牲は中々尠少にあらず候。

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

が思ひ掛けませう。私共は貴族院にはモナッと物の判つた人もわらふと思つて居りました。少くとも社會の潮流が何の方向へ向つて流れて居るか位は心得て居て、舟を巧みに此潮流に棹すやうな力量のある人達が澤山居られるとばかり思つて居りましたが、よく〳〵考へ直して見れば成る程是も無理ならぬ譯です。累々たる二百有餘の頭顱は概ね是禿、婦人を奴隷同樣に心得て居る執拗者流の天晴な名案ですもの。併し私共廿世紀の舞臺に活動する婦人は、政界の空氣が速かに新陳代謝して、今少し活氣ある、時世に通じた人々を以て組織せられた貴族院を見たいと希望するばかりであります。

この飴屋

有香

騒々しい春興の東京繁榮の裏手に寂しいみすぼらしい飴屋が建つて居る。予はいつも、近道だから、監獄の裏坂道に沿うて此の前を學校へと通勤するのである。

春の日のうらゝかな或朝、予は圖らずも此飴屋の前に、六十歳の坂を越した老翁の飴屋が、其おろした飴盤に群がり集めく悪鬼大將どもを叱して居るのに出會つた。

『飴屋の店で喧嘩するんぢやないよ、喧嘩するんなら青山の原でするんだよ、ナア、飴屋の店がこわれて仕舞へば、飴屋さんは明日からお飯が食べられなくなるからナ、いゝか、ナア……』

●　●　●　●

予は聞くともなしに之を聞いて、何とえらい警語を吐く爺もあるものよと驚嘆した。『喧嘩するなら青山の原へ行け』と、まうだ、青山の原は天下晴れての喧嘩の場所だ、野蠻な國際的喧嘩の稽古場ではないか。又國へ、こんな喧嘩の爲にお飯が食へない飴屋が、世の中に何れ程あるだらうか。

予は嘆息しながら、殆んど無意識的に重き歩みを運んだ。やがて後方から飴屋の太鼓の音がボロボン、ボコボン、ボン〳〵、と予を追つかけて來た。

音樂家ゼンニー、リンド女史

女史は西暦一千八百二十一年、瑞典のストックホルム府に於て呱々の聲を擧ぐ。父は語學の教師なり。女史生れて僅かに三歳の幼時已に僅一聞覺えたる事のありしばかりの歌曲を暗誦し朗吟せりと傳へらる。十歳の頃は夙くもストックホルム座に於て見役の伶人として出座せり。越えて二年、女史が美妙なる聲も其最高音符を害すること能はざるに至り、四箇年が間は初めて出場せず、此間女史は歌謠の研究及作曲の修養に身を任れたり。

此頃より女史が音聲はもとの自由に復して、力あり奥妙なる音調を以て二度一世風靡の音調を歌ふことを得るに至り、一年有半を經て女史はストックホルム歌劇界の明星として群星の光を奪へり。

次で女史は音樂研究の爲め巴里に赴かんと欲し、之が旅費を得んが爲め絶えず演奏會を催ほしぬ。巴里に於て佛國の教師は女史の實力を認めざりしかば、女史は再び故郷に歸れり。

西暦一千八百四十四年、女史芳紀二十有三に達したる時、ドレスデンに赴き、翌年擧選せられたるヴヰクトリア女皇の知を得て演唱せり。此事は端なくも獨逸の各市に於て女史が名聲を博するの端を開きぬ。一千八百四十七年倫敦に赴き、非常なる人氣を以て歡迎せられ、此地に於て始めて喜劇を演唱せり。一千八百五十年には亞米利加に赴きしぬ。將女史が亞米利加旅銀を暴立たしめたる者はピー、ティー、バーナム氏なりき。氏は女史の助力者として破天荒の歡迎を受けたり。女史が紐育に於て演唱せし際の如き入場券の賣高非常なるものにて、殆んど信憑し難き迄の數に上れり。

女史は間もなくボストン府のオットー、ゴルドシュミット氏と婚せり。氏は伶人にして樂長なり。爾後女史は出嫁するとも杜絶えず勝に成り、屢々樂壇音樂會には女史は深厚なる同情と多大なる熱心とを以て喝采せられしを以て、吾人は女史を目して樂壇音樂師と呼び做すも敢て不當ならざるを信ず。女史は晩年を倫敦に於て暮り、一千八百八十七年を以て同地に逝けり。女史の生涯並に其の歌聲は現音樂界社會の寶たり。

通信

●（上略）……ボクは内村先生が神（神ありと假定して）との交通にまで喙を容れる者には候はずして彼がこの單純明白なる基教を提げて之を現代文明と相抱合せしめんとするに於ては尺寸の寄貨も之なく候、要之ボクの考へも略はアナタと同一と存ぜられ候、たゞ神の存在を認めざる點に於て少しく人とその形式を異に致し候　妄言多罪

平民社ニテ　徳永狂風

●今朝の新聞には御請願の一部分衆議院にて可決され候由御熱心の程に議員連も征服されたることゝ存候御愉快のほど御察し申上候私共は此上ながら私共多數姉妹のため御盡力被下度伏して奉願候

三月十七日　小石川　田添幸枝

海外時事

○桑港議會に於ける婦人問題の勝利

サクラメント二月二十日の通信に曰く、グロープ、エル、ジョンソン氏は本日、婦人參政權附與に關する憲法修正案を再議に附する事を請求して其許可を得たり。是は昨日の議會に於て無効に歸したる者なりしが、氏の激烈なる討論演說の末、十六票に付する五十四票の多數を以て此提出案は通過せり、原案に反對せる者の名を擧ぐれば、ピショップ氏、カンドラー氏、フキンテー氏、フキッシャー氏、オハンス氏、リユーカス氏、リンチ氏、オブリーン氏、スニーダー氏、スタントン氏、桑港のトラムソン氏、トランスー氏、ウエスケ氏、ウキルソン氏、ワイアット氏及ベアーワリー氏等是也。

桑港選出の議員の多數が普通選擧權法案に賛成せし所以は、自己等の提出せる法案に充分の勝算あらしめんとの希望に出でたるものにして、之が爲め再議に附せられたるエスセルマン氏提出の彩票禁止案は昨日を以て通過したるなり。

彩票禁止案を再議に附する爲めにベケット氏の爲せる運動は、前案再燃に反對する三十七に對して三十を得たるに過ぎざりき。

今や本案は元老院の手に交附せられ、リプキット氏は元老院に於て本案を攻撃するやに聞く。

コーター氏は昨日の法案を再議に付するに就て盡力せしも力及ばざりき、之に仍てジョンソン氏案は通過せり、地位を變更せるものといふべし。

○妙齡の刺客

昨年十一月八日發の聖彼得堡通信に見ゆる所にては、かのミン大將を暗殺したるゾナイデ、クノプリアニコフ孃は軍法會議に付せられ、絞罪の刑を受くべき宣告せられたり、孃は控訴せよと勸告するものありしも一言にして之を斥け、且つ審問を以て茶番狂言なりと一喝し去れり。其宣告書の朗讀に際し、孃は破顏一笑したりとぞ、健氣にも亦殊勝なる哉。

○富家の婦女社會主義者と成る

米國婦人にして最富裕なりと聞えたるヘッティー、グリーン女史は頃者自ら社會主義者と成りし事を宣言し、米國は必ず社會革命を經ざる可からざる事を說きトラストは其前徴なりと言へり。

○英國婦人選擧權運動

倫敦發二月七日の電報に曰はく、本日午後肩書ある知名の婦人、大學の學位を有せる婦人、諸學校の制服を着たる女學生、女流美術家、學士會其他婦人會の會員、婦人禁酒會員、紡績女工等、各地方より集り來り、婦人選擧權運動擁護の爲め、雨中に行列を作り、泥濘に塗れて倫敦市中を行進せり。彼等は一應ハイド公園に赴き、隊伍を整へ、夫よりピカデリー街、リゼント街、ポールモール街等を經てトラファルガ街頭に至り、茲にて公會を開き、其演說中、國會が一日も速かに婦人選擧權の議案に注意せん事を要求せり。

○下婢組合と下婢の權利

濠洲ウエリントンよりの報知に仍れば、同地にては仲裁々判法の下に下婢組合の設立を見るに至れるが、仲裁々判法の規定には、組合員は次の要求を爲し得る事と成り居れり。

(一)祝祭日に勞働する時は一時間に就き一志を要求し得。

(二)月、火、金、土曜の各日には午後七時半に業を罷め、木、日曜の各日には午後二時に、水曜日には午後十時に、業を終ゆることを得。

(三)總て夜間は十時に家に歸るを要するも、木曜日には特に深夜に至る迄外出するの自由を有す。

而して此下婢の要求に關しては主婦は其相手と成つて仲裁々判所へ出廷を命せらるべきものなりと。

○婦人は男子よりも革命を好む

紐育社會主義婦人會にては今般百弗の懸賞を以て「婦人と社會主義運動」と題する論文を募集し初めたり、其廣告中に曰はく「婦人は一般に社會革命に對して興味を有する事男子に數等勝る、且つ此思想に動かさるゝことも遙かなり、蓋し現社會に於て奴隸的生活に沈淪する者は、男子に在つては主として勞働者而已なれど、女子は殆んど其總てを擧げて此悲境に陷れるが故也」と、箇中の消息喝破し得て當れり。

○革命婦人の終身懲役

昨年八月二十五日、露國の首相ストリピンに爆烈彈を投せんと企て、捉へられたるキルモグア、テレンチエグアの二孃は二月十一日彼得堡にて裁判を受け、辯護士を須ひずして直に死刑の宣告を受けたるが、政府は之を輕減して終身懲役となせり。キルモグアの父は縣會議員にして此日母は特に公判廷に列するを許されたりといふ。

次號豫告

- △題未定　安部磯雄
- △小說家士の家內　二葉亭主人
- △題未定　木下尚江
- △男子貞操の實驗　久津見蕨村
- △內村先生に上る書を讀みて福田女史に與ふる書　幾島友四郎
- △題未定　門田雅雄
- △國家論　時川貞子
- △和歌
- △新體詩
- △寄書及其他

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

農家と理科（一）

増田　操

はしがき

家とはどんなものぞと云へば親子兄弟夫婦などの相集りて生活し居る棲處を指して名くるものにして彼の町と云ひ村と云ひ將た郡と云ひ國と云ふもこの家の多く集りたる上に就ての名稱である、たゞ土地のみにては町村の名も郡の名も將た國の稱へもないのである、されば家は國を立る要素の一分子にして國の本である既に一個の分子たることを知らば家庭の善きと惡きとは直ちに一國の上に及ぼすことは言を俟たない、然るに現今世の開け行くに從ひ教育の道も何くれとなく日に月に進み去年よりは今年昨日よりは今日と整ひ行く中にて、猶ほ未だ維新前の有樣より如何ほど進みしかと疑はしきものは農家の家庭である。

德川氏三百年の民政の金科玉條として遵奉せし所のものは曰く。「百姓は生きぬ樣、死なぬ樣、治むべし」と生ては以て上に抗せん死なせば彼等は米を作りて其主に致さゞらん旨い哉其略即ち爲政者は農民を以て一個の器械と見做せり否彼等は農民を以て一種の生產的動物と見做せしなり、故に彼等は農民に令して曰く膏粱を食ふなかれ、絹帛を衣る勿れ、高樓に棲む勿れ、四脚の門を建る勿れ、茅茨の下に居れ、短褐を衣よ、藜藿の羮に甘んぜよと壓制暴政の下に因襲其俗を爲し「百姓は馬鹿でも出來る」とか「百姓には學問が要らぬ」とか何とか云つたのであつたが、今日の農家は決して馬鹿では出來ない、要するに是迄の農業の方法を見るに云はば理屈も何もないのであつて米を作るには籾を苗代に蒔き、時至つてこれを本田に移して草を除き肥料を施ればそれで善いと云ふやふであつたが、これからの農業は到底そんな事では出來ぬ農學も一つの專門的學問であるから、これに從事せんとする者は學理の大略位は覺へて其學問を實地に應用して作らねばならぬ、勿論農業に限らずどんな職業でも馬鹿でも出來ないことがないが、馬鹿では完全に事業が出來ない、成程農業も易い所から見れば易いが難しい所から見れば難しい、何でも然ふだ假令へば吾人の疾病を治する醫者の事業は難しいと云ふが、尙ほ輕症には賣藥でも癒すでないか、されど完全に行はんとすれば、なか〳〵難しいものである、農業も又然ふである、一段步五圓の益得を見るも耕作の術である百圓の利益を見るも又耕作の術である、其巧拙の如何に依つて利益の多寡を見るのである、其巧拙を問はずして農業は馬鹿でも出來る、易い業だとは不理屈千萬の話ではあるまいか、加之資本家制度の惡潮に驅られ、生存競爭漸く激しく、我農產物が如何に外國品の輸入に壓倒せられつゝあるかを見よ、幾多の紡績會社が靑空黑くして製造しつゝある原料の綿花は何れの國にか仰げる年々幾千萬圓の巨額を原產地に拂ふでないか小麥粉は米國のならでは菓子屋は滿足せず、砂糖も巨額の金を拂つて外國より購入し、漆はジャパンの國名と深き因を有する特產なるも、これ又外國に仰ぎ、大豆は支那朝鮮より取らざるを得ず、雞卵は如何、これ又廉價を以て支那より輸入に逢ふ、何と可慨しいことではないか、此等は皆な熱心が足らぬからである、要するに合理的に農業を營まんとするにはなか〳〵難しいものだ、假令ば玆に或種の作物を栽培するとせん、土地は農業の母であるから先づ土壤の性質を究めねばならぬ、此の土壤の性質を究めんには化學、鑛物學、物理學等より導かれたる土壤學の智識に依らなければならない、既に此の土壤に適する作物を知らば次に肥料を研究せねばならない、即ち作物は如何なる成分を好んで吸收するか而して其中の何成分は此土壤中に存在するに依り、肥料としては何成分を施らねばならぬとか、又作物が如何なる部分、又は如何なる機關に於て其養分を吸收するか、生理的作用は如何など研究せなくてはならぬ、成長するに及んでは病蟲害の驅除豫防せんければならぬ、即ち昆蟲學、黴菌學、病理學を學ばねばならぬ、約言すれば一粒の米麥を作るに際し、施業上、合理的且つ經濟的ならんとせば土壤學、肥料學、種子學、理化學、植物生理學、昆蟲學、黴菌學などの力に待んければならない、思ふて玆に至れば農業もなか〳〵難しいものである。

總て事物は皆な自から一の天地を造るものにして、詳らかに吟味すれば森羅萬象これに備はり一點一畫と雖とも其意義がある、故に若し心して事物を研究する時は一葉の木の葉、一片の花瓣にても極めて深遠なる眞理を含む、或は學者その一生をこれに托するも尙は其妙理に達し難きを憾む、彼の進化論にて有名なる英國のチャールス、ダルキン氏は蚯蚓の研究に就て凡四十年を費やしたりと、彼れ蠢々として土中を蠕動して何の譯もなく土を食つて土を吐き常に塵芥の中に棲める一小蟲、而も何の因緣あつて彼の大學者の名を全世界に聳動したるか、獨乙の某學者は豆の研究を終生の專門としたりと稱するもの、我邦にも近頃は追々其趣きを生し、桑名學士の貝殼蟲、渡瀨學士の螢、小貫學士の浮塵子の研究に數年尙は從事しつゝありと云ふ、されど心なき身には天を仰げば一葉の幕の如く、地は一枚の褥に、星の光は銀の留針の如く、至つて淡泊に見へて微妙の眞理を看過すべし、若しそれ心ある精妙なる觀察者に取りては愈よ遠く益々深きを感ずるであらふ、家庭のことも然ふである、毎日薪を折り焼べて火を燃やし、窓を開いて煙を吐し、食つては又焚き、其爲すことの毎日〳〵同一のことを繰り返すは面白き單調を極む、少しく理科思想を起して進步の趣味を以て事物に當らされば何の事物か單調に陷らざるべき、薪に輪あるを見ては其數に依つて幾年を經たるかを知り、又これより次第〳〵に精細に觀察する時は一見して彼の木と此の木と異なるなどを悟るものである、其煙は如何、灰は如何、こんなことを云へば高等小學讀本などで解つてゐると云ふかも知れぬが試みに「米は如何にして生育したりや」と問へば、我邦農家の多くはこれが明答に躊躇するであるまいか、由來我邦農家は天然に依つて天然を觀察し、少しも人爲を以て天然を觀察しなかつたやうである、以上說く所の理由を基とし以下數次、農家の家庭に於ける婦女子諸君に自然の研究の面白きことを勸告するのである、

紅怨紫愁

德永狂風

初戀のひゞきにふれし小さき家の地にあらざりし大津浪の朝

横さまの銀河の浪の音をきく心地するかな涼しき夜風

かぎりなき恨をいだき入りしてふ女の精か潮の夕霧

自嘲する歌よみたまひ小扇にみ顏かくしぬうつくしき人

やはらかき山羊の垂毛にしづくすと野おもふ日なり秋雨のふる

質朴の野に棲む人はうつくしき星の夜にして羊と寢ねぬ

うつくしくも淺ましきかなさめやすき紫みてははかなみ給ふ

もの怨じしたまふゆゑにみだれぬる黑髮斷てといふ人をうらみぬ

あはれとも君よ見たまへあさましき人と人とは國をつくりぬ

寨の灯の街の雨して新内の歌うたふ子の三昧のみだるゝ

入月の雲の形の革命の天馬の樣に勇ましきかな

幸うすき運命のやうに白うして星の一つを屋の上にみぬ

『迫害』歟

福田英子

世の下婢なるものは、今の世に在つては實に親綱に對する勞働を供給するに止るの具となれる者あり。主婦の命する所を受動的に遵奉すれば能事畢れりと心得て、他は意識しても之を行はんとせず、從つて行動に表裏あり執務に所謂陰日向あり、世俗のいふ雇人根性なる惡習慣に染みて拔くべからざるものあり。普通の家庭に在つてもかゝる下婢は使ふに骨の折るゝものなるが、殊に我等の如く內外の事を一身に負ふて家庭を經營するものに取りては斯の如き婢を雇ふ事實に忍ぶべからざる苦痛なり。之を以て我は家庭の一員として家庭內部に起る各般の事務に與るものを得て、幾分業務に分業法を採り一身一家の經營の苦を輕うせんとを冀ひき。適過般養育院より一少女を得たるを以つて、之を薫陶し我等の理想に近き家政擔當員たらしめんと志し、炊事より各般家庭の事務を教へ、やゝ之に馴れしむるを得、心窃に我理想の一端が實現せらるゝを喜び愚鈍なりと雖彼が前途に望を屬し居たりしが意外にも彼は我が志の存する所を辨へず、我に貫いて殆んど世の常の下婢と異らざる擧動を敢てし、甚しきは、我家を棄てゝ奔るに至れり。固より彼は養育院裡に長じ、生來の痴鈍に加へて此の情味を解せず、家庭の何たるやを了せざるもの、如き少女なれば無理ならぬ事なるが、又出奔の動機も我等の如く一面の社會と相抗するが如き事業に携はるものは或は何時獄裡の人たるやも知れざれば、家庭の責務は皆が雙肩にかゝらんも測り難ければ、その心して努力せよ、と諭し聞かせしを畏怖したるに出でたる者なるべけれど、その如き事は實に我不德の致に座す、而も全く家庭の觀念なき者に炊事洗濯の道を敎へ漸く日常家庭の務に馴るゝに及んで、今回の擧あるは我遺憾や實に辭の外に出づ。迫害か迫害か知人の或者は之を玩味の迫害也といふ、我はかくの如き瑣事を迫害來れりとは意識せず、我等が前途は實に遼遠に幾多の迫害と危險とは豫め期する所なれば、かくの如き一小事件の爲めに犠牲を來すが如きは萬々これなきを保せんも、身邊多事、外には男子の職とする所に身を委ね、內には自ら炊事を執り家庭萬般の事務に當らざるべからず、加ふるに本誌の經營も殆んど一身を以て之に當るに於ては、三面六臂の具足せるに非ざれば到底凡てに於て萬遺なく處理し了する事難からむ。我は本誌讀者に對し本誌が發刊の期を違ふる事の屢なるは、かゝる事が其一因を爲せる事を告げ、併せて一犠牲は來たすとも決然之が爲めに屈し終るものに非らざる事を告白せんと欲す。事を好むにあらずして止むを得ざるに出でたりとは雖、世の爲めに起つて、其犠牲の尠少ならざるを思へば自ら悚然たるものあり、翻つて又心中に動からざる自恃と發奮との念の湧き出づるを禁ずる能はざるなり、千萬の迫害も我に於て何かあらん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

干潮

加藤眠柳

（三）

なやましげに己が居間に戻つた潮子は、行儀よく針臺の前に坐つて、去年の生存つた毛もくじやらの大蜘が、障子を這ふのを熱と視つめてゐたが、やがて徐に針臺の抽斗から、聖書と讃美歌を取出した。そして先づ聖書を默讀し、次に低聲で讃美歌を謳ひだした。

そこへ戞然と背後の唐紙を啓け「お潮、あれ、和女又そんなものを讀んでるのかい？」と憎さげに詰つて入つて來たのは姑の石子。

潮子は豫々舅と姑から、斯るものを讀むことを嚴禁されてゐたのだ。然し信仰の念の篤い潮子は、嚴禁されて後も内々で、聖書を繙かずにゐられなかつた。潮子は何處の教會にも多く見る、うすぺらな、輕薄な、日曜日に教會へさへ行けばそれで信者の能事畢れりと思ふやうな、未信者より劣るクリスチャンぢやない。それであるから此光村家へ來るにも、安息日に教會へ出してもらうのを、第一の條件として置たのだ。然るに耶蘇ぎらひな光村家の兩親は、間もなく潮子が教會へ出入するのを、きびしく禁じるのであつた。潮子の失望は甚麼であつたらう！。ともすれば人を譏したがる教會員等は、潮子の信仰の冷却を卑しんで、聞くに堪へぬ陰言を語り傳へた。

「ねえ、お潮」と石子は眉を逆立てゝ寄つて來て「あれほど言つて置たのに、又そんなものを出して讀むてえのは、いつたい如何した了簡でおゐでなのだい？ねえ、お潮！」と憎ろしげな聲を顫はす。

「はい」とばかり潮子は俯むいてゐる。

「おまへ何だね、私の言ふことなんか、きいちやおくれでないんだね？」

「いゝえ阿母さん、そんなことは」

「ないもんなら私の言葉を、ちつたあ用ひさうなもんぢやないか？ねえ！おまへ何だね、私を馬鹿にしておゐでなんだね？」

「あら阿母さん、そんな、そんな馬鹿になんか私」

「ぢやあ何爲おまへ、そんなものをお讀みだえ？そんな本は、お父さんも大きらひだよ。さ、こつちへお出し、目障りだから預かつて置く」

石子が聖書と讃美歌とを奪ひ取つて、つと立去つた後で潮子は、しばらく其處に正體もなく泣伏してゐた。

（四）

おぼろに霞む月の夜毎を、茶室に近い庭の大松の下に忍び寄つて、低いけれども力ある聲で、一心不亂に祈禱を捧げ來つた潮子は、今宵も更けて庭へ立出で、その松が根に跪づいた。しばらくして熱烈な、血の流るゝやうな祈禱の聲が、高く低く、斷えんとしては續く。

「……何卒、何卒この、光村家を祝福なしまへ。又、兩親が一日も早く、その頑固な心を開いて、くだけたる魂を以て、御前に額くの時が來りますするやうに……」

唯これだけが明らかに聞かれた。

やゝあつて立ち上つた潮子は、しづかに葉越の月を瞻仰げたが、ふたゝび足音を忍ばせて裡へ入つた。このとき茶室の後からぬつと姿を現したのは、光村家の下男の市助。

「あゝ驚いちやつた、感心しちやつた。ほんとに、まあ、何てえ優しい、えれい奥さまだらう！耶蘇を信じるとつて、あんなに隱居さまに苛められながら、隱居を怨めしいとは思はねえで、はやく神さまを識るやうにとつて、一生懸命に、風邪ひいて寢てゐる身で、夜よなか起きて來て祈るなんて、ほんとに驚いちやつた、感心しちやつた。えれい奥様だなあ！出來ねえこつたなあ！俺も以前にや、ちつとんばかし耶蘇を聽いたことがある。又内所で、聽きに行つてみやうかなあ！しかし奥樣、風邪が重くならなけや可いが」と市助は斯く獨り言つて、臺所口の方へ廻つて行つた。

（五）

風邪が肺尖加答兒に變じ、つひに結核性の肺病になつた潮子は、良人や兩親が心づかひの効なく、日に〳〵病勢が募るばかりで、今は賴み難なくなつたのである。

「潮！」と良人は優しい聲して呼び「私は久しく、宅を留守にして、私女に苦勞させたねえ。和女、何か今、希望が有るなら言ひなさい、何でも、私に能きる事なら叶へてやるが」と臨終に近い妻の顏を目守つた。

「はい、私、もう何にも。唯、もう一度、牧師さんに」

「牧師に？會ひたい？」と良人は背後の兩親を視回り「牧師に會ひたいと云ひますが、如何したものでせう？」とさすがに躊躇ひながら、低聲で訊いた。

「さうねえ」と石子は俛首れたが「如何します、貴郎？」と光村老人を視る。

「招びにやるさ、どうせ、もう死んで行くんだもの、今生の希望だ、叶へてやるのが功德だ」と老人は答へた。

やがて下男の市助は、川田牧師を招びに行つた。然し牧師が馳つけたとき、潮子は既に縡切れてゐた。

それから二月經たぬうちに、光村家に眞の神の光が入つた。主人も隱居も下男も下女も、神の前に一つになつて祈るやうになつた。

○

されど、我なんぢらに告ん惡に敵する勿れ人なんぢらの右の頰を批ば亦ほかの頰をも轉して之に向よ

○

終まで忍ぶものは救はるべし

○

イエス曰けるは人の爲し得ざる所は神の爲得ところ也

枕頭吟

黒瀬なか

ふと夢覺めし夜半の床
うつゝに君を見まもれば
隙もる風に燈火の
消ゆるが如くはためきぬ

あゝ那と此くもわればかり
幸なく世には生れけん
君を戀ひにし其折は
思はぬ人の妻なりし

罪ある業と知りながら
忍び忍びて重ね褄
いつしか君に添ひ臥しの
嬉しき身とはなりにけり

あしたの露に花は笑み
人の情にわれは生く
邪氣を殺して君とたゞ
こゝに老ひんの願ひかな

戀は命の始なり
戀は命の終なり
戀に生れて戀に死ぬ
理想の國ぞしたはしき

君が心は革命の
遠き御空を驅りつゝ
君が形骸は愛着の
强き絏に繫れぬ

「男の子ぞ此くて死すべしや」
義憤の涙幾度か
片寢の袖を潤せし
自然にも身は痩せて

「百千の民を救はずば
二人し在るも何かせん」

君が諭の一言に
わが世の春は惜しからず

三筋の糸に革命の
調べはのせて奏づれど
破壞の力盡き果てし
君が歌こそ乏しけれ

無用の才と筆を焚き
虛僞の器と口を閉ぢ
死を待つ人の默々と
淸き妻に泣かさるゝ

○短文、短歌及新體詩を募集します

▲短文　清新の趣味ある短文を募ります。嬉しき事、悲しき事、腹の立つ事、何でも郵便端書に明瞭に記して投稿して下さい。

▲短歌　新派、別に何等の制限をも設けません、しかし、あまり貴族的臭味のあるのは取りません。

▲新體詩　調の如何を問ひません。但しあまり長いのは嫌です。艶なの、優しいの、凛としたの、雄々しいの殊に革新の氣を帶びたのを歡迎します。

毎號の原稿締切は、五日と二十日です、用紙は何でもよろしい、端書は殊に輕便でよかろうと思ひます。婦人諸姉の振つて御投稿あらんことを切望いたします。

ちりちらす人も罪れたふるさとの
露けき花に　かぜぞふく　　悲鳴

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

馬

荒古脱人

骸骨の樣な樹木の梢は土塊を撫でる程撓はむで激しく悲鳴する、眞黄に枯れ枯れた草は蹂躙られた樣に一樣になびいて其上を落葉の堆積がさら〱と死後の苦痛を囁き交し乍ら何處か、か迷ふて行く。乾いた冷めたい土が煙の如く大地から權起きて空の方へ舞ひ擧る、田鼠の樣な雀の群が疲曳として低く飛で行く、——凡てが斯然從忽はしく亂離々々の破壞を指して驅つて行く樣な「冬」の日に、自分は何事かを發見しやうと思つて、市街から野を渡つてとある森の中へ入つた。

暫時の間無言で歩いた。

悉く葉を落して、灰白色な皺深い肌を露出した白楊、椽、山毛欅などの古木どもが騒々しい太陽の光を浴びて立ちはだかつた底を、冷めたい空氣の香を嗅ぎ乍ら漸く小一町も來たと思つた時、突然、横合からど、ど、ど、どと云ふ荒ら荒らしい物のけはいがしたので吃驚した。

其處には馬が六頭、各自に最寄の立木へ繋がれて、前肢で落葉を蹴つたり、携る樣にして枯草を噛むだりして居るのであつた。

自分が近づいたので凍縮さうに筋肉を縮めた驛毛の一頭は鼻息を荒らくして野獸の如く尖つた耳を擧げた、それから嚇した樣な唸斷をした。すると、他の五頭も急いで其の廣ろい前額を擧げ、一樣に耳を釣つて、鼻息を荒らくし乍ら、瞼皆と二皮目の大きな眼で當方を眄た。

栗毛、鼠色毛、驛毛、黑毛、蘆毛など、六頭の毛色こそ各自違つて居るが規律良く刈り調へられた鬣、尻毛などの具合、塵まびれになつて古びた乍らも嚴丈な鞍、手綱、腹脊、鐵具などの具合から觀るに、如何しても軍隊の馬らしくあつた。

主人公は何處へ失せたものか、主の無い所々しい鞍を脊負ふた六頭は其の跳肢を傳ふて、枯若いた地上の寒さが來ぬ樣にと、絶えず脚を動かしたり、腦の筋肉を震ふたり、胴震ひをしたりして居る。

で、自分は默つたまゝ、眤と凝視て居ると、初めは自分等が各自自由に公開された食物——脚下の枯葉や枯草等である、——に關して何か防害でもせらるゝのかと懐疑相に傍の人間を瞰眈へて居つた者の、此の單純な動物共はつい今迄甘ま相にむさぼつた枯葉の香や、枯草の味を忘れてはならぬと云ふ風に、大きな頸を自然と下へ落して、やがて又鼻を蠢めかし乍ら食ふことを初めたのである。

食ふ、食ふ、食ふ、見てる内に彼等は各自に己が周圍のものを食ひ盡くし、手綱の革紐が動く頸を牽張つてもう其以上は達かないと云ふ邊へ行く迄食ふた。

軍隊の馬ならば楣は充分に與へてある筈なものだが、食慾的な道歴動物共は時として「喰」以外に、別に食ふ事を藝術として自ら樂むことがあるものだ。

其の痴鈍い樣で鋭敏い鼻、其の性慾に赫く漆黑な双の瞳、石をも噛み碎くべき精力を蓄へる頸骨、齒、輪郭の粗大な横顔、——等は皆此の單純な動物共が衝動する己が本能を滿足に發展した時の獸態なのである。

自分は妙な感じが催して來たもんだから、如何にも滿足した如く胸を張つて胴の血管を膨ました此の健丈な動物どもを離れて、又元の通り歩き乍ら何か考へやうと思つて、倚り懸つた龜裂のある椽の幹から立ち上つた時、一時り木枯も休んで暗然とした森の空氣を震ふて氣が遠くなる程の物の響がした、——遠くの方から沈んだ喇叭の聲がしたのであつた。

途端に哄々乎と木立の彼方から當方へ馳て來る一群。

一樣に、色の襤れて黑羅紗に眞鍮の釦を附けた軍服を着込み、黄帽のある帽子を被り、長い劍を鳴らし、皮の粗糙い深靴で、荒く死屍の樣に空葉の堆積、溜つた土の凹噂、無意味に作れたる枯樹、陰氣に樹々の根方へ叢生た眞黑い灌木などを踏散らして急はしく動作をし乍ら來る。四人である。馬共の主人公らしい、砲兵と知れた。

「おーい、急がにや駄目だぞッ。」

眞先に驅つて來た肉附の緊合した赭ら顔の一人が毛糸の白手袋をはめた片手の革鞭を、忽と一處に鄙まして、斯う大聲に呼んだ。

「ふむ、だ、大丈夫だい、準備だらう彼奴ア。」

「準備さ、準備だとも、出發の迄は僅かに五分だ。眞さ、急げッ。」

「急げッ。」

「急がう。」

「さうだ、急がう、急がう、悠乎急がう、はッはッはア。」

四人はひつたり馬共の前で停つた。

見慣れぬ自分が手帖と鉛筆とを持つて馬の傍に立つて居るのを不思議相に熟視したが、頓て急ぎの爲故か、各自向き直つてそゝくさと何か用意をして居る。

馬共は息遣の荒らい自分等の主人公の胸の處へ額を擦つけたり、懐かしげに鼻を鳴らしたり、躍然と前肢を動かしたり鞍や鐵具をガチャ〱する程身震るひしたりするのであつた。

見る見る四人の兵士は二疋づゝ三行に馬を双ばせて、前後六頭を重い鐵の鎖や汚れた革の紐などを以て一團の活きた筏の如く繋ぎ合はして了つた。

其れは砲車を曳く一組だなと思つた時には二人の兵士は前後の一頭づゝに騎り他は徒歩で緩々と森の横手へ行く處であつた。自分も好奇心から其の跡へ從追いて、斑らな古木の影を浴び乍ら横手の方へ窪地に、入つて行つた。

恐ろしく静寂込んだ森は、淺す樣な乾燥いだ枯草と枯葉の臭ひとに滿ちて、處々、憂鬱な陰影のある凹みや、水の淋つて、溜つて居る穴などには靈ながら霜が結び相、稀薄な空氣は刺痛しい程冷めたいのである。

黑つた色合の馬と兵士との後姿は寒むげに縮んで、油斷なく木立の間を急足した。

一町程進むと兵士等は傍へ外れて五六株の椽を穿つとすぐ森の外界へ出て了つた。自分も後れて森から脱た。

一歩出るともう其處は悲しげに草の黄ばむだ野が一面に開展けて居て、飃と吹き付ける木枯は、向側の小丘からはらはらと一崩落の落葉を足下へ吹き寄せる。

五間も距つてよい邊に、斉塗の重げな鐵の砲車が、人間を壓服す程な容積を持して横はつてるのが目についた。

「寒いなア、馬鹿に寒い。」

「馬鹿に。」

「どうだ此風は。」

「見ないか、陰つた陽だせ、雪だ、此雲はどうしても、又降るかな。」

陰氣な素鼠色の雲の扉と扉との間から薄い雲母の樣な太陽は底寒い二三條の黄ろな光線を野一杯に擲つて居るのである。

白の手袋は馬上から

「が、しかし、最早鳴るせ、早く仕やう、手が鑑むだらう。どうッ、此馬！」

「やい、畜生、はうらよう、はい、どう。」

「ほう、急ぐんだつていになア、畜生奴はい退けつ。」

四人は寒げに蹙顔をしながら後脊の浩大な砲車の轅棒へ件の六頭を繋ぎつけ樣とするのである。

冷酷な砲車は巨人の樣に恐ろしい威力を守つて土塊に食ひ付き、居弱い人間の力では到底解し難い「不動」を以て發えて居る。徒歩の二人は寒さで感覺の無なつた手で重い轅棒を持擧げて持つて居る馬上の他の二人はたじ〱と六頭の筏を後脊へ戻さうと試みた。

「後方へ、畜生、何故動かんのだッ。」

「分明らん畜生だなッ、チョッ谷本君一つ撲鞭て呉れんか、もう此奴等は厄介者いんだから。」

馬上の他の丈高い痩せた兵士が少し腹立たしげに自分の騎つた蘆毛の手綱を無手と牽挿つた。

「撲て、撲て、撲て！　身顫のしやアがる程。」

ぴしやりッ、ぴしッ。鞣えた鞭音。

前方の白手袋に華で絢ふた太鞭を強曳いて自分の騎つた栗毛とすぐ隣りの黑毛との脊を思ふ樣激しく撲つたのだ。

慘忍な「冬」は此の響の内にも閃いた。

栗毛と黑毛との凍冷相な脊の筋肉は戰々と波狀を起して、痛さに堪えかねたらしく躍ね上る。と、同時に後ろの痩せた男は更に蘆毛を牽戻す。

「可哀！　撲て、撲て。」

馬上から此表情の鈍い動物共が、如何にかして人間共へむかつて自分等の苦痛を表現して同情を求めたいとする如く、情けなさゝうに眼を閉ぢたり、頸を縮めたり、鬣を振つたりするのを蔑視めた彼ぎすの兵士は、一寸其の油つ氣のない顏面の筋肉に拘攣を起し乍ら、更に叫びまに手綱を牽いて、自分の蘆毛を膝く拍車で蹴つた。轅棒をひかへて待つて居た徒歩の二人も堪りかねて、づか〱と大きな靴を引擦り乍ら中の二頭の轡を攫んで、無暗と鞍へ結び付けてあつた鞭を解き乍ら、今は例の太い革鞭の音は四人の手から發するのである。

折りしも向側の銅色の小丘邊りから吹き付けた風は、おびたゞしく擧げた此の馬共の悲鳴と共鳴した。

しかし萬事は無駄であつた。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

青瓦色に塗られた傍の砲車は生命あるもの、如く、一間とも隔らぬに、奈何しても馬の群を近かしむる事を禁じた。磁石の脅嚇に魔はれた様に苦悶する馬共は、狂ひ出し相に鳴くのみである。

『片意地奴！餘計な事に骨を折らせやがるッ、山下君、宮崎君、やア皆一整に揆らう！』

白の手袋は脱げかゝつた軍帽を、拳で二つ三つ、腹立たしげに上から壓し付けて叫んだ。

『よからう、畜生もう喇叭だと云ふに、良しとも、もう血の出る程揆たう、軍律だ。』

『可矣！全力、揆てッ、一、二、三！』

木の枝を折り拉いだ程なもの音と同時に、怺へ兼ねた動物は上衝る苦痛の狂鳴を、慘憺な位大きな頸を振り乍ら初めた。

『やア、堪えるわ、堪えるわ、痛けりや後方へ引け、引け、畜生ッ。』

四人の兵士の顳顬の血管は縄の様になり、涙の様な汗は其の荒らつぽい顔面を縦横に流れた。骨に徹る鞭の一と打ごとに單純な動物共は、僵る程前方へ蹈むで二頭づゝ、脊と脊とを擦る様にして焦心つて居る。

而して鞭の閃くごとに、拍車の突くごとに、革の引かるゝごとに、一重に疼酸い苦痛の手から逃れたいと、前方へ急いで、脊骨を隆むるのみなのである。

鐵を填充た其二十四足の脚蹄がしたゝかに蹂躙つた枯草、黒土、絶體絶命の馬の悲鳴、泣き出し相な顔をして噴怒る兵士等の聲、此様な大混雜を冷然と視下した砲車、凡て、之等の闘爭へ飄々と赭、黄、黝などの森の空葉を擲ける木枯、―自分は深刻な「冬」の酸劇に刺されて了―つた。

『遅刻！あゝッ、畜生、堪らんな！』

恰も其時、廓然と開放の野を、遠くの方から又々喇叭の様な音がしたのである。

『遅刻だッ!!!』

四人は等しく叫んだ。

途端に雄躍り上つた栗毛のおどろになつた鬣は、白手袋を鞍から横様に引外して、大地へ撲と投げつけた。

『やつ、しまつたッ。』

後方の騎者は矢庭に自分の鹿毛を飛び下りた。

『奈何したッ？』

眞黄な土塵が灰の様に舞つた、見ると白手袋は奪ふ様に大地から革鞭を執り上げて、

『大丈夫！』

起上つた。

其時、愚鈍な馬共は蹄を整へて前方へ驅出した。ばら／＼と追ひすがつた四人は容赦なく引留め様と抵抗する。發矢、發矢、發矢、發矢………。

鞭は蛇の如く四方から閃いて、強烈な「人」の力と「馬」の力とが單位を均一にして、今や大格闘をして居るのである。馬の脊のあたりからは、鮮生しい血が迸つた。

斯くて一分、二分、三分、五分、十分複雜な格闘は稀薄な空氣を震動し乍ら續いた。

しかし、弱い「人」の力は「馬」の強烈な力に比して熄えやすいものであつた。苦痛の鼓吹によつて極度の狂力を暴露た愚鈍な動物共は、何處かへ驅け走つて了つたのである。

其れと同時に四人の兵士も何處かへか見得なくなつた。

疲曳と縮萎た冬の陽が一時、蒼白めた森の投影を枯野に浮映した時、銅色の小丘からはまた荒放たる北風が吹いて來たのである。

。　。　。　。　。

翌朝用事あつて再び自分が此の野を過ぎた時、例の小丘へ立つて森懐の邊を注視したが、悲劇のあつた時迄、城の様に聳えて居つた青襟の砲車は影も形も無かつた。唯二條の深く黒土を噛んだ轍が、長く小丘の麓を委曲つて、何處かへか消えた蹤跡があるのみだ。

自分は、斯麼な事にも自然と、人生との不調和な點が、籠まる、様な心持ちがしてならなかつたのである。

雨中の撮影

遠藤生

鑛毒被害地として世に知れ渡つた谷中村のその後は、『鑛毒問題の猛悪』を孕むで『買收事件』の醜塵に苦しみ何々大臣と名くる巨魁の膝下の笠帽被官の怪腕蠻に奪はせらる、こと又愛に數年、貧白の彈丸、狂法の鐵鎚、爾散林來、國體淵源。四百五十の平和敗れて、二十の民家僅かに殘り、纔に剩ふ幕の有様、蝸蝓の力も及び難きを、天谷中村をむなしふせてか、田中翁孤に雖なり。さるにても、猛しくもあやふきは我谷中村なる哉。苦戰難抗の刻下に在つて、擾くる人の瘠れにも學に、しげきは攻め來る賊の脅迫と欺騙と、白晝も猶晴夜の状況である。

盍ぬる十四日は天色曇り、雨さへ落ちて西風加はり、底冷えに寒い日であつた。僕は朝風に民家を見廻はり返つて見れば村人三五、脅迫に戰慄き諦界に惑ふもの予の戻りなば待つて居た……。之を語り、之を慰はり、慰め敷へて稍やしばらく、鶴て雨更に加はる頃、都の客の男女三人……、荒花として訪ふものは、血眼に狂ふ狩猟のみなる淋しい村は時ならぬ賑ひ。

『さあ、とうぞ……』

『……御機嫌よう……』

『歩るいてではお疲れでせう？』など言つて居る處へ駿々と音して梶棒の止まるや、母衣の中からは福田女史……、一隊は一段の賑ひ。

『隨分ステーションで導れましたよ』主婦が敷いて吳れた新らしくない座清團に座はりながら、福田女史が斯う言へば

『私こそ、どの位待つたか知れない……』と響へるのは逸見君。都の人の笑の波は荒屋に充ちて、話の聲は小波の上に漂ふて居る。ほつと一息吐いたが、雨は倍々繁く、決して歇み相にも見えない。

實は木下氏と同伴で昨日來る筈であつたとか、田中翁からの書面は、逸見君の話と同時に讀んだのである。今日は田中翁の依頼もあつて谷中に撮影に來たとの事寫眞師なる千賀君は都合があるから、雨が降らうと火が降らうと、出掛けて撩ると、外の人々も忙がしい方々、兩人は一人も無い、で御持合の辨當を濟み、少時休んでそう／＼仕度にかゝる。

男は皆草鞋穿き、僕も一月の末に谷中へ來る時、書籍を賣り財布を拂つて求めた七圓半と言つたのな、値切つたら負けた五圓のインバネスの襟を捲くつて、福田女史、逸見夫人に同じて足袋跣足、村の人も五六人、案内者は大澤茶入郎といふ川鼠のやうな色のジルクハツト（多分古河あたりの道具屋から五錢位で買つた物だらう）を被つた男である。總勢無慮十餘名、余の行列は愈々繰り出した。

『いよ／＼、福田さんは丁度三韓征伐に出陣ましますき神功皇后さながらだ……』と言ひ囃したのは逸見君。喧々喃々、夢々として雨中の進軍。

門出に際して僕は考へねばならない事がある。愛に義援者は加藤安世と云つて、嘗つて新紀元に何やら谷中の事を投書したこともある……田中翁の書記役として一昨年から谷中に來て居て、頓に監軍の餌に釣られ、暫らく個面を被つて居たが、此度愈々反旗を擧げた小狐の如き彼は、小猩の如き總督と共々人民を欺し、其所有財産を奪はんとして、昨夜に民家を叩き、或は警察署の事務所に使ろ、見よ彼を捨りつゝ往き突ふ彼の背を拝眼翻々、此男代金○百圓也。

香々はまづ行きしなに加藤が居る家を訪ねた。福田、逸見兩氏に對する彼は首の据らぬ木賊である。諸問に對する彼の態度は騒で色もなく、左りとて悧れに睦し氣に、わらぬ力へと眼を外らして、陰險な音を二三度聲ける。

僕は彼が上京すると許つて、警長等と酒を被りつゝ、古河町あたりの小町る裏座敷に談じたりし事を訐いて一喝を加へた。

『ひどい男ですチー』と其家を去つて裏手の畦を行く時、福田女史の口より洩れる。

『あれが偉いかも知れませんか、あの盛り怒りも憎しもしないですからチー』と僕は言ふ。

雨は愈々降り、風は益々吹く。晴天ならば昨日けふ、荒城のあたりに桃も咲き、碧空高く雲雀舞ひ且つ謳ふ、東には近く筑波の嶺、南遙かに富士の嶺、西にちよと傾けば淺間の嶺あり、春謡の聲から恋をあらはし、香風は此處にも爽やかに吹き來るものを、今日といふ今日は生憎である。皆が堤防まで來た頃は手も足も冷たくて墨の斑模斑なあたり、ヒューと打つ風、シタ／＼と掠むる雨。

『オー寒い、足の裏が……』

逸見夫人から出そうな聲な、案外福田女史から聞く。三里十八町の堤防は十年前に民間工事の制度を廢して縣廳の直轄事業と爲られてから、知らずいつしか破損に爲られて、遂に三十五年の洪水に百間未満の破損が出來て、由來縣廳は陸に食物を與へさす、隣に入夫も入れて要なき堤の數百間を傷け、村人をして年々水害に苦しましめ、然して片端から買收で奪取る。

まづ香々は風雨を避り傘を落して、第一に破堤の累を撮る、僕は福田女史のカバンを持つ、千賀君は獨り忙しい。

『あーつめたい』

『ひどいなあー』と、六尺に三寸足らずの星野君も暁ろ。

寫眞機械も飛ばされそう、降りかゝる雨には濡れる。

『雨が香々を贔まず本恰も政府が平民を苦しめるやうだ……』と僕。

福田女史は數々谷中に來て親密にせられたので、村の人は知つて居る。女史は其後の狀況など聞きつゝ語りつ、併し婦人共後から來る、逸見夫人も元氣なものだが、一同は一ヶ塊に寫眞機を圍むで集つた。

『こんな時にこんな天氣とは……幼稚な有神論なんぞ吹き消はれて了はふ』と僕が言ふと。

『生憎ですチー、何といふいやな雨でせう!!』と婦人の聲。

漸く第一の撮影が濟むで、それより第三第五とあちこち騒せ廻はり、土手の高丼へ登つたり下つたり、度毎に逸見君は婦人方の手を曳いてやる。

足が冷めたい手が痛い『指が動けなくて利かない』と眞赤な手をして千賀君は撮めつて拔けない螺絲を逸見君に頼む。

婦人方は先に行つて、村の方で暖まつて貰ふ事にして香々純寫眞隊は後から堤を捲つて行く。然うする内に日は暮れる。

『さあ、藍足ア』と誰かゞ言つて一緒に走り出した。大な聲いで居る野中の一軒屋で、兩婦人と一緒に成つて、先の僕の宿に返つたのは夜見五時である。都人と村人と一同家の前で寫眞を撮る、此時の可笑しかつた事！。

最初は皆尾宛く撮れたらしいが、大に千賀君も窮さうと言ふので、居合せた保やさんを速成技師にした、處が車夫先生敬へられた通りな、可なり大聲でヒイー、フター、ミイーとやり出した。するト福田さんが喉き出して了つた、待つた待つたなど言ふ、千賀君も手を振り出した、車夫先生妻な手にした儘、機械のうしろを見つたり、キヨロ／＼狼狽たへる。遂に皆も噴として騒いで了つた。

その次にも一度千賀君が撮つてから足を洗つて、家へ上がつて、逸見婦人、福田婦人は湯で古河まで先に、後より逸見君と千賀君とが再び草鞋でかへる。千賀君は一番骨折であつた。皆が去られて夕飯を喫べて、風呂に入つて、その夜も三四人村民が來たので、僕は福田女史に就いて語つたら、孰れも『はアーー』と驚き呆れて、尊敬的の口調を洩らして聞く。村民は援軍の奨勵を蒙つて、大に勇み且つ樂んだ、逸見福田兩氏とも谷中の土地の有權者なのである。

錆の香集

小野有香

泣きさますな　いづれ盲の　舊き世ぞ　屈む否みて　里歸へりませ。

「出戻り」の　譏は受けよ　何恥ぢん　道踏む身には　永久に新た世。

なめげなり　蝸蘆の舊風に　馴れずとて　獸に似しよ　妻追ふ男は。

敎したまへ　兄の眼は　闇かりき　人格を蔑みせば　疾く歸へり來よ。

弱きもの　虐ぐるを恥ぢぬ　現世に　泣くを生命か　醒めよ女子。

乙子ゆゑ　里歸りせし　君を見ては　母のおん眼の　晴れやらぬかな。

（以上六首離婚したる妹に）

革命の　先驅と開く　梅の花　雪を排せば　百鳥より來。

護刀　雲とむらちろ　錆の香の　拭ふも惜しき　春の夜の闇。

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

カメリヤ洗粉

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の御肌には殊に効驗著し

定價　大瓶廿五錢　瓶入十二錢　袋入五錢　小袋三錢

本舗　ライオン齒磨發賣元　東京神田柳原川岸　小林富次郎

伊豆三島　花島煉乳場製　名譽ある　金鵄ミルク

東京市日本橋區大傳馬町
發賣元　逸見山陽堂

於內外大博覽會受領名譽金銀一等諸賞牌

體操及び運動器械　樂器及び教育用品

日本東京市本郷區本郷五丁目特電下谷八四五
美滿津商店

御用諸學校

Manufacturer of Various Appliances for Gymnastic & Other Out-door Games.

東京神田表神保町
安藤商店
電話本局四八四番

新築落成移轉

小兒病　內科　外科　診療

府下淀橋町角筈（水道前）
淀橋醫院
竹下繁太郎

●齒科治療　自午前八時至午後六時●

神田區須田町廿六番地
齒科醫　吉瀬才一郎

勞働者諸君に限り藥價診察料共に御隨意書間執業者の便利上夜間十時迄治療仕候

各國語聖書、基督教書類
其他一切新刊書類確實販賣
東京神田區猿樂町二十五番地
振替貯金口座六三三〇番
中庸堂書店

珍書
至筋の綾
岡鬼太郎新著
價五拾錢稅六錢
東京京橋　隆文館

本社　大阪市東區大川町四七（長電東二〇九五）（同三四六一）
社長　廣岡久右衛門

大同生命保險株式會社

支店　東京市京橋區南紺屋町一一（新橋長電五一八）
支店　京都市柳馬場三條上る（長電五三六）
出張所　名古屋　廣島　小樽　長岡　仙臺
〃　高崎　福島　金澤　福岡　岡山
代理店　全國各地

福田英子女史著　菊版美本肖像入

妾の半生涯

定價卅五錢、郵稅六錢
第四版既に賣切、更に
第五版を發行致し候

大井憲太郎等と共に有名なる大阪事件に與せし女傑景山英子は即ち本書の著者也、彼女の幼少が郷里の才媛として如何に譽高かりしか、彼女如何にして大阪國事犯に與せしか、在獄三年の生涯は如何なりしか、如何にして情人と離れ、如何にして良人を得たるか、更に妻女として赤貧なる、慈母として悲哀なる、寡婦として多恨なる彼女の生活は如何なりしか、本書は、實に其の曲折波瀾、錯節纏綿せる一個の大悲劇を描ける也。

發行所　東京市本郷區本郷千駄木林町
日高有倫堂

趣味

四月號

東京博覽會出品名畫　數葉
狂人日記　二葉亭
脚本小說審査の標準　審査員十名
子規談片　中村不折
文學者の邸宅　五大家邸

（本號廿五錢）

東京神田
彩雲閣刊

△一部四錢五厘、十部四十二錢、二十部八十錢

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY